

# 吉岐の嶋を激励 十両も手の届く範囲

東海吉岐の会理事 近藤由美子・近藤英子



写真左から岩谷領密副会長に近藤由美子理事、近藤英子さん

なりました。玉の井部屋宿舎の地藏寺から程近い高蔵寺団地入口のイタリアンレストランで、食べるのも仕事の吉岐の嶋はコース料理を二人前戴きました。食事をしながら力士の日常的な生活や環境などの質問に、素人の私達に易しく答えてくれました。厳しい勝負の世界ですが、十両も手の届く範囲、ますます楽しみになりました。



吉岐の嶋

吉岐の嶋と談笑の中から  
「そうなの？びっくり！」

◎力士は車の運転は禁止。  
「へえ、そうなの」

◎シートベルトは妊婦と同じ扱いで、しなくて良い。  
「一同、へえ」

◎幕下力士に給金はない。  
「へえ」

◎その代わり協会から二か月に一度、場所手当を頂く。  
「私の年金と一緒ね！」

◎横綱のまわし綱は、一門

少し波がある時などは特に起りやすい

原的に言

えは、波として海水浴場に入り込んだ海水は、何処かへ抜けなければなりません。

特に海水浴場のすみのほうなどは起りやすい

ようです。この吉岐の島の海水浴場の中で、強い離岸流が発生しやすいポイントを紹介しておきましょう。

石田の大浜海水浴場の海に向かって左側、岸が岩になつて居る場所は、遊泳禁止の波の高さにならなくとも少し波があるだけで、沖に向かって流れる離岸流が発生することがあります。潮が流れる速さは速い時で時速10キロくら

いにはなりません。海底の砂も流されてそこだけ溝状に深くなつており足がつかなくなる事もあるのです。近づかない方がいいですね。

芦辺の清石浜、ここは沖に向かって左右にあるテトラポットの内側なんか



大浜は写真左側に離岸流が起りやすいので注意

注意しておきたいと言えは、海辺の生き物もその一つ。クラゲやウニなんかは代表的な危険生物ではないでしょうか？しかし、意外に知られてない危険な生物も沢山あります。例えば、エイは尾にヤスリのようにサラサラしたトゲがあり触ると大変危険です。特にアカエイなんかは、近くの海で暮らしている種類です。浅い場所に来ている事もまれにあります。話によれば水中を歩く時、ス

尾にヤスリのような大きなトゲがあるアカエイ

も強い離岸流が発生しやすい場所になっていきます。近づくなければ、ほぼ流される事はないと思えます。是非頭を置いて欲しいものです。そしてこれはもしもの話ですが、離岸流に流されてしまえば泳ぎ止まりのフイを超えてしまった場合は、とにかく慌てない事です。強い離岸流と言つのは、一部だけでそんなに長く続きません。浮き輪などを持っているならばそのままつかまつて流れが弱くなるのを待つ方がいいです。

流れに逆らうように泳いで戻るのは体力をうばわれるだけです。絶対にやめましょう。出来れば流れに対して横に泳ぐとかなり速やかに離岸流から抜け出す事が出来ます。このような離岸流は、僕らサーファーは一年を通して体験しています。

しかし自然の事ですから、理屈だけでは伝えられない事も沢山あります。少し波があると思ったら絶対に注意して下さいね。

## 《短歌とエッセイ》市山 節子 吉野川の渓谷(徳島県)

吉野川の大歩危峡のあらし岩しづきを上げて清流はしる  
祖谷溪に追手逃がれし落人の平家の山ざと息つぎており  
恐るおそるカズラの吊り橋わたりいて吸い込まれそうな流れの蒼さ  
山の斜面に張りつくごとき民家見えだんだん畑と茶畑つづく  
秘境ムードただよう道の民宿に苔むす水車がわれを呼びひる  
ゆるやかな流れと岩の小歩危峡あゆめる人見ゆ土讃線より

## 祖谷かずら橋と峡谷

日本三大秘境と呼ばれる阿波の断崖絶壁が続く祖谷溪は、今だに人々を寄せつけない厳しい雰囲気を持っています。

屋島の合戦で敗れた平国盛が身を隠したとの平家落人伝説が残る自然環境は、昔のま、で吉野川や、祖谷川がつくるV字谷は深く、その紅葉の美しさは西日本一だそうです。

祖谷溪のかずら橋は、自生しているシラクチカズラで編まれた吊り橋で、平家の落人が源氏の追手を防ぐ為、いつでも切つて落とせるようにカズラで造つたとの事。全長四十五米、幅二米、水面からの高さ十四米。吊り橋のすき間から、下が見え、いざ渡るとなると、一歩踏み出すごとに、ゆらゆら揺られて後戻りもできず、とても恐ろしい体験でした。

大歩危(おおほけ)峡は、吉野川が浸食を続けた大峡谷。八キロ位の渓谷が続いて、下流に入り小歩危峡になります。川の流れる、ゆるやかにエメラルド・グリーンの流れに、白い岩肌が映えて、まさに自然が造つた芸術品だと思えました。

## 投稿 3 牧師室便り 月の光 長尾 知明

月を見て「美しい」と思う気持ちほどなたにもあると思います。ところで、その中でも最高に美しい月の光景をもっている方はいらっしゃるでしょうか。母方の祖父の葬儀の後の会食のこと。私は祖父の戦友だった方と隣になりました。少し酔いが進んだので、その方が私のような若い者に思いつく話も聞きました。「宴会なんかでもね、戦友が集まるとすごいんですよ。もう、徹底的ですからね。燃やしちゃったからね。？。相槌も打てず、お返しする言葉も思いつかず、傾聴しておきますと、その方は続けて話し始めました。

「南方へ行きますとね、夜なんか、もう本当に月が綺麗なんです。日本じゃ考えられないような美しさです。海岸でさざ波の音なんか聞きながらですね、いつまでも月を眺めたりしました。

この月が、今も私の心に残っている最も美しい月となりました。



真夏の青空に高くあがった鬼風